

## オルガノン要約 § 273～§ 283

§ 273 二種類以上のレメディを一度に投与することは絶対にしてはならない。

(注 1) 化学的親和性による化合物や一部の人工化合物は一つの物質として、単一レメディとして使うことが出来る。しかし、酸によって得られる植物の抽出物＝アルカロイドの利用については、抽出物を使うのではなく、植物そのものからレメディを作ること。

§ 274 真の治療家は単一のレメディだけを投与すること。一つのレメディだけで十分治癒できる。二つ以上のレメディが人体にどのように作用するかは予想できない。そのようなことはプルービングとして確認されていないからである。

(注 1) レメディ以外に別の薬剤や薬草茶や浣腸剤を用いることは非合理的である。

§ 275 適切なレメディとは、

A) 正しいレメディ

B) 正しい投与量（ごく微量でよい）。

のことである。正しく選ばれたレメディでも、その投与量が多すぎると不必要で余計な影響が及ぶ。正しいレメディは身体の中かで最も感受性があり、既に自然の病気から攻撃を受けたところに影響を及ぼすからである。

§ 276 適したレメディであればあるほど、またポテンシーが高ければ高いほど、それだけ一層レメディは大きな害を及ぼしアロパシー薬よりひどい結果になる。とりわけ頻繁に反復投与するほど、その被害は大きい。

レメディによる人工的な病気によって重疾患になり、それを根絶させるのはこの上なく難しい。

(注) レメディを使いすぎることによって生じた病を反効力化するレメディは見つからないだろう。レメディの病気をレメディで治癒することはできない。

§ 277 効力の上がる穏やかなレメディとは、

A) 適切なレメディ

B) 適度に微量（＝投与回数。ポテンシーのことではない。）

§ 278 適度に微量とは？

どれほど微量でなければならないかを理論的に推測することはできない。

A) プルービング B) 患者の感受性 C) 正しい経験

この 3 点によって、全てのケースにおいてどの程度微量で良いのかが分かる。

§ 279 ホメオパシー的に選ばれた高ポテンシーのレメディなら、どんなに微量であっても自然の病気（部分的にしても）を治癒し始めることができる。

§ 280 治癒が達成されたとき：

レメディがうまく反応している時は、震盪によって少しずつポテンシーを上げながら投与し

続ける。全身が回復したと感じたときに、元々持っていた病気を穏やかに感じ始める。これはもうそれ以上レメディーが必要でないことを示している。自然の病気から解放された根源的エネルギーがレメディーの影響を受け始める（ホメオパシー的悪化）。

§ 281 8～15 日間、すべての薬の服用を止めてもらい、乳糖粉を与える。

わずかな悪化があってもそれがレメディーから生じた症状なら、しばらくするとそれらは消失する。その後適切な養生をして、本来の病気が出ないならば治癒したと考えられる。

しかしまだ症状の痕跡が残っているなら、まだ本来の病気が完全に消えたのではないと見なし、ポータンシーを上げて再投与する。

ただ、感受性の高い人もいるのでポータンシーを高くするときは慎重に。

§ 282 ホメオパシー的悪化(本来の症状が著しく現れること)が1回目から発生した場合は、投与量が多すぎることを示している。

慢性病の治療の基本：

A) 原則＝極微量から始めて、少しずつポータンシーを上げていくこと。

B) しかし皮膚で勢いづいた三大マヤズムの治療は”例外”である。

専用のレメディーをどんどん高ポータンシー化し、毎日、時には一日に何回も投与（大量投与）しなければならないし、そうしても痛手は蒙らない。

病気とは：

A) 根源的生命力へのダイナミックな攻撃のことであり、物質的なものではありません。つまり物質的に除去することはできない。局所的症状を除去すると患者を生涯際限なく重疾患にする。

B) 外的な徴候として示された内的な悪性マヤズムの本体であり、これを消し去ることができるのはレメディーだけである。

但し、尖形コンジロームについては、完治させるためには、内的だけでなく外用としてレメディーを同時に用いる必要があることもある。

§ 283 真の治療家は、最もよく選び抜いたレメディーを極めて微量で処方する。

なぜならレメディーを間違えてしまったとしても害が少なく済むから。その害は次に処方された正しいレメディーによって、速やかに消えるだろう。